



富士箱根伊豆国立公園

伊豆諸島ビジョン

～国立公園でつながる伊豆諸島～



令和2年9月

国立公園伊豆諸島地域連絡協議会

目次

はじめに	1
伊豆諸島ビジョンの構成	2
1. 伊豆諸島地域の特徴	3
2. 国立公園伊豆諸島地域の基本理念	8
3. 基本方針と取組の方向性	10
4. 各島ビジョン	13

はじめに

富士箱根伊豆国立公園伊豆諸島地域（以下、本地域）は火山現象の影響を大きく受けた地形、地質、植生等に特色を有し、富士山地域、箱根地域、伊豆半島地域と一体的な火山列島として、昭和39年に富士箱根伊豆国立公園に編入されました。

本地域においては環境省のほか1都7町村の地方公共団体や観光協会、観光事業者、自然保護団体等、様々な主体（以下、関係者）が国立公園の管理運営に関わっています。

しかし、これまで各島内及び島間において、国立公園としての地域のあるべき姿や、それを実現するための国立公園の管理運営の方向性について、関係者間で共有・議論する機会は十分ではありませんでした。そのため、近年本地域で共通して対策が必要となっている「希少動植物の保全」や「自然資源の適正利用の推進」等について、関係者の共通認識に基づく計画的、効果的な対策が実現できていないという課題がありました。また、「国立公園は規制が中心」との認識をもつ関係者や地域住民も多く、保護と利用の両方を推進する国立公園の役割が正しく理解されていないという課題もありました。

本地域は、国立公園が地域全体をカバーする唯一の枠組みであると言えます。国立公園を核として様々な関係者が一体となって自然環境の保護や利用の推進を図ることで、火山や海などの自然環境を主な魅力とする本地域全体の魅力の向上や発信につなげることによって地域経済の発展に寄与し、自然環境の保護と利用の好循環による持続可能な地域社会を実現することが可能であると考えられます。

そのためにはまず地域の関係者の間において、優れた自然環境や風景などの国立公園の価値についての認識を改めて共有するとともに、本地域における国立公園の役割を保護と利用の両方の観点から見直し、その目指すべき方向性に関する共通のビジョンをもつことが重要です。

本ビジョンは、国立公園の管理運営に関わるあらゆる関係者が協働で本地域の保護と利用を推進することによって持続可能な地域社会を実現するための共通の指針として、有識者や関係者を交えた意見交換の結果を踏まえ、本地域の目指すべき方向性についてとりまとめたものです。

今後は本ビジョンに基づき、関係者が役割分担・連携しながら国立公園の管理運営を進めていくとともに、本ビジョンの内容を関係者による自然環境の保護や利用の推進に関する各種施策に反映します。

伊豆諸島ビジョンの構成

本ビジョンは以下の4つの内容により構成します。

1. 伊豆諸島地域の特徴

⇒伊豆諸島の国立公園としての価値や国立公園を取り巻く社会環境を、地域の特徴としてとりまとめました。

2. 国立公園伊豆諸島地域の基本理念

⇒1でとりまとめた特徴を地域の魅力としてまもり活かしていくために国立公園が果たすべき役割を「基本理念」としてまとめました。

3. 基本方針と取組の方向性

⇒基本理念を受けて、国立公園伊豆諸島としてありたい姿を実現するために重要なことを4つの基本方針として掲げ、現状と課題を踏まえたうえで、今後の取組みの方向性として特に重視すべきものを挙げました。

4. 各島ビジョン

⇒基本方針に沿って取組を進めるに当たって、国立公園に指定されている8島について、島ごとに大切にしたい魅力やその現状を踏まえ、特に重視すべき要素を、各島の目指す方向性としてとりまとめました。

【附属】アクションリスト

⇒ビジョンの実現に向けた取組を関係者間で確認・共有し、効果的な連携につなげるためのリストです。関係機関が実施している施策や、5年以内をめどに進めていくべき取組を基本方針と紐づけて整理し、国立公園伊豆諸島地域連絡協議会において定期的に確認・共有します。

1. 伊豆諸島地域の特徴

(1) 伊豆諸島の概要

伊豆諸島は、本州中部を南北に縦断しマリアナ諸島まで連なる「富士火山帯」に属する海底火山の山頂部が海上に現れたもので、活火山を含む多様な火山島の集まりです。東京都の南方海上に位置し、伊豆大島から嬬婦岩までの太平洋上に点在する有人9島（大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島）及びその他の小島の総称で、行政上は大島町、利島村、新島村、神津島村、三宅村、御蔵島村、八丈町、青ヶ島村の2町6村により構成されます。

人の生活に関する最も古い痕跡は大島の約8,000年前の下高洞遺跡であり、縄文時代早期には本土から丸木舟に乗って各島々へ渡ったとされています¹。律令体制が敷かれて以降、明治初期までに源為朝や宇喜田秀家などをはじめ、政治犯など5,500人以上が流人として伊豆諸島へ流罪になり²、海水に削られて丸みを帯びた「玉石」を用いた石垣や屋敷の建造技術、歌や踊りなどの文化を島にもたらしめました。江戸時代には幕府直轄領だったものが、静岡県等の管轄時代を経て、明治11年より東京府（現在の東京都）の管轄下におかれしました。人口は昭和35年をピークに減少傾向にあり、2019年12月時点の有人島の面積及び人口は表のとおりです。

表 各島の面積及び人口

	大島	利島	新島	式根島	神津島	三宅島	御蔵島	八丈島	青ヶ島
面積 (k m ²)	90.73	4.12	22.97	3.67	18.24	55.20	20.51	69.11	5.96
人口 (人)	7,561	322	2,170	529	1,920	2,437	319	7,343	167

主な産業は農業、漁業、観光業であり、温暖湿潤な気候を活かした花卉栽培や、アスタバ等の栽培、キンメダイやタカベ、イセエビ等を対象とした漁業が行われています。年間観光客数は全島合わせて45万人程度であり、海水浴やダイビング等のマリンスポーツや釣りをはじめ、温泉、キャンプ等に利用されています。また、ハイキングの利用もみられ、海と山の両方を気軽に楽しむことが出来る点が特徴です。島への交通手段としては船舶及び航空機があります。船舶は竹芝を主として、熱海や下田等からも航路があり、八丈島及び青ヶ島以外では主な交通手段となっています。航空機は大島、新島、神津島、三宅島については調布から、八丈島については羽田からの航路があり、八丈島では主な交通手段となっています。また、一部の島間ではヘリコプターの運航があり、特に冬季の船の就航率が低い御蔵島や青ヶ島等への交通手段として多く利用されています。交通手段ごとの航路及び所要時間は図のとおりです。

¹ 樋口秀司、2010『伊豆諸島を知る事典』東京堂出版

² 同上



図 伊豆諸島への主な航路及び所要時間³

多様な火山地形と海岸地形、常緑広葉樹を主体とする植生とがあいまって優れた自然の風景地を形成していることから、大島から八丈島までの有人8島及びそれらの属島のほぼ全てが自然公園法に基づく国立公園に指定されているほか、特に鳥類の生息地・繁殖地として重要な複数のエリアが鳥獣の保護や狩猟の適正化に関する法律に基づく鳥獣保護区に指定されています。また、2010年に大島全域が日本ジオパークに認定されました。

³ 東京愛らんど 島へのアクセス <https://www.tokyoislands-net.jp/islands/access> を改変

（２）成り立ちと火山景観

伊豆諸島は、太平洋プレートがフィリピン海プレートの下に沈み込んだことによる火山活動の結果形成された富士火山帯海底山脈の山頂部が海面上に現れたもので、様々な噴火履歴を持つ火山島で構成されます。地質的には、新島の宮塚山を中心として東西で大きく構成する岩石が異なり、東側は主に黒っぽい色をした玄武岩質、西側は白っぽい色をした流紋岩質となっています。火山という特性を基盤にしつつ、陸においては大小様々な噴火口や荒々しい黒色の溶岩から白砂の砂漠まで、海岸部においても白砂青松から急峻な崖まで、噴火年代や火山噴出物の違い等に起因する多様な景観を呈することが大きな特徴です。

噴火した年代が新しい大島及び三宅島は、いずれも玄武岩質の溶岩による黒い砂礫地や荒々しい海岸が特徴的で、大島と三宅島では現在も火山活動が活発です。これらの島の沿岸では、海底に流れ出た溶岩により形成されたアーチ状の溶岩や六角柱のような岩石の柱の集合体である柱状節理など、変化に富んだ海底地形がみられます。

一方で噴火した年代が古く、玄武岩質の利島及び御蔵島は、海岸が長い年月をかけて波の浸食（海食）を受けた結果、ダイナミックな海食崖が発達した特徴的な島の形をしています。

八丈島は噴火した年代が新しい西山（八丈富士）と古い東山（三原山）によって形成されているためその対比に特色があります。

以上の玄武岩質の島々に対して、ケイ酸分を多く含む流れにくい流紋岩質の溶岩で形成される新島の宮塚山以南、式根島及び神津島は、噴火の際に噴出した溶岩流がドーム状に固まり、変化に富む地形となっています。流紋岩質の砂礫は白砂の美しい海岸景観を形成し、式根島の唐人津城や神津島の天上山などでは山頂部でも白砂に覆われた特徴的な景観がみられます。

また、伊豆諸島は新旧様々な噴火履歴をもつ島の集合体であることから、噴火による溶岩が海岸線を広げてなだらかな地形となった新しい島から、火山活動が停止して浸食による谷地形や海食崖が発達した状態を経て、更に浸食がすすんだ小さな島となり、最終的に硬い岩脈（マグマが貫入して固まった板状の岩体）だけが残りやがて消滅するまでの、火山島の一生を学ぶことが出来る点も特徴です。

（３）動植物

本州に近い距離に位置していることから生物相は本州と近い特徴も多くみられる一方、花粉を媒介する昆虫の違い等に起因する植物の形態の変化等の適応進化や、捕食者の有無等に起因する外見の特徴や産卵・育児特性の変異など、島嶼環境ならではの特徴もみられます。また、本州から分離して形成されたものではない海洋島であることから、各島の生態系は本州から風や波、鳥等によりそれぞれ独立して偶然に流れ着いた種子や動物が定着することにより始まっています。このため、島ごとに異なる生物相が成立しており、食物連鎖による島内の生物間の相互作用も異なるため、同一種についても島ごとに生息密度や外見の特徴が異なるといった多様性を生み出しています。

○植物

伊豆諸島の植生は海洋島かつ火山島であるという特徴に影響を受けており、噴火年代の相違により島ごとに異なる様相を呈しています。噴火年代が古い利島や御蔵島、八丈島の東山では遷移（植生の移り変わり）の最終段階であるスダジイ林が広がり、林内には樹木に付着して生育する着生植物や巨樹・巨

木も多くみられる一方、噴火年代が新しく標高差に富んでいる大島や三宅島では、それらに加え、植生が無く火山噴出物に覆われた裸地から植生が侵入して遷移が進んでいく諸段階も確認することができ、海岸植生も含めた多様な植生がみられます。また、ヤマユリの変種であるサクユリは伊豆諸島の島々に共通して生育していますが、本土に近い島では花びらの斑点が多く、本土から遠い島では花びらに斑点が無いなど島ごとに模様が異なるなどの変異がみられます。このように、島によって遷移の段階の違いや植物の変異による多様な植生がみられることが特徴です。

表のような固有あるいは準固有の種や変種も多く存在します。

表 伊豆諸島に固有性が高い植物の例⁴

伊豆諸島固有種	ハチジョウコゴメグサ
	シマガマズミ
	ミクラシマトウヒレン
	イズノシマホシクサ
	オオキリシマエビネ
	ハチジョウカンスゲ
	ミクラザサ
伊豆諸島にほとんど固有に分布する種ないし変種	オオシマカンスゲ
	シマホタルブクロ
伊豆諸島固有変種	シマキンレイカ
	ニオイウツギ
	ハチジョウイタドリ
	サクユリ
伊豆諸島を中心に分布する種・変種	オオシマザクラ
	ガクアジサイ
	オオバヤシャブシ
	イソギク
	ワダン

○動物

海洋島であることに加え、火山島であり河川や池沼に恵まれていないこと、噴火による既存生物相の破壊的打撃が大きいことから、哺乳類、両生類、爬虫類の種数は少ない一方、そうした動物類が少ないことにより鳥類の生息に適した環境となっており、多くの固有種や固有亜種を含む豊かな鳥類相を有しています。例えば伊豆諸島やトカラ列島でしかみられないアカコッコやイイジマムシクイ、分布が限定されているカラスバト、固有亜種であるタネコマドリやモスケミソサザイ等をはじめとして、貴重な鳥類の重要な生息地・繁殖地となっていることが大きな特徴です。また、度重なる噴火により草地が残されている三宅島では、ウチヤマセンニュー等の草原性の環境を好む鳥類がみられたり、八丈島のオース

⁴ 上條隆志、2017「伊豆諸島の植物の固有性と保全」『Mikurensis』 vol.6, 40-46

トンヤマガラは噴火年代が古くエゴノキやスダジイが多い東山でしか見られなかったりというように、鳥類の生息環境には火山活動に起因する植生の遷移段階の違いも影響しています。

海洋生物に目を向けると、温かい黒潮が島にぶつかって発生する渦が栄養豊かな深層水を表層に運ぶ「島陰効果」や、火山活動による複雑な海底地形が生み出す潮流の影響で栄養分が集まる「潮目」が発生しやすいこと等により、多種の沿岸性魚類をはじめとして、鯨類やサンゴ、ウミガメもみられる豊かな生物相を形成しています。また、カンムリウミスズメやオオミズナギドリをはじめとした海鳥類の貴重な繁殖地にもなっており、海の豊かさは海鳥を介して島の自然の豊かさにもつながっています。

陸域の鳥類以外については、伊豆半島と伊豆諸島のみに分布するオカダトカゲや、伊豆諸島のみに分布するミクラミヤマクワガタ、ハチジョウノコギリクワガタなどの希少種がみられます。また、ヘビが生息する島としない島でオカダトカゲの幼体の色彩が異なる等、同一の種についての島間の変異も生み出していることも特徴です。

(4) 人と自然とのかかわり

伊豆諸島の島々にとって、火山は噴火の脅威をもたらす存在である一方で、大島で「御神火」という言葉が多用されているように人々は火山を信仰の対象としてきたほか、火山の恵みである温泉は各島において重要な地域資源となっています。

また、伊豆諸島は草食動物の少なさから食べられる野草が多いことが特徴であり、古くから食用利用されてきたアシタバは伊豆諸島の代表的な農産物にもなっています。農業を行うに当たって、焼き畑を行った後に窒素固定能力⁵をもつオオバヤシャブシを植えて地力を蓄える「切替畑」など伊豆諸島ならではの持続的な管理も行われてきました。水産資源が豊かであることから漁業も盛んですが、水の少ない島が多かったこと、冬季の海況が荒れやすいこと等から、貴重な水と塩を節約しながら海産物を長期保存するために「くさや」にして食べる文化がみられます。くさや作りに用いる「くさや液」に含まれる微生物相の違いから、島によって香りが異なるのが特徴です。そのほか、大島や利島などのツバキ油をはじめとして、御蔵島のツゲを使用した木工品や八丈島の草木染めの織物である黄八丈など、地域の自然資源を活用した特産品も多くあります。

⁵ 空気中の窒素分子をアンモニア等の化合物に変換することで窒素の植物の体内への取り込みを可能にする能力

2. 国立公園伊豆諸島地域の基本理念

火山と海、そこで暮らす人と生きものを核として「つなぐ」国立公園伊豆諸島

前頁までに述べた伊豆諸島地域の特徴を踏まえると、国立公園として大事にしていくべき伊豆諸島の魅力は「火山と海、そこで暮らす人と生きもの」という言葉でまとめられます。そしてこれらの魅力を活かして持続可能な地域社会をつくるために国立公園が果たすべき役割を「つなぐ」と表現しました。ここで「つなぐ」が意味するもの、また国立公園が「つなぐ」という役割を果たすことによって実現したい地域の姿を下記のとおり示します。

【伊豆諸島において国立公園が「つなぐ」もの】

◇ 人と自然をつなぐ

…島民及び来島者が島の自然に対して、関心をもち、大事に思い、その特徴を正しく理解したうえで、触れ親しみ、活用するための仕組みをつくります。そうすることで、観光をはじめとした様々な産業、教育、防災等において島の自然が有効活用され、持続的に活用していくために保全を行うといった保全と活用の好循環を促し、人と自然が共生する地域社会をつくります。

◇ 来島者と地域をつなぐ

…島の外の人々が伊豆諸島のことを知り、関心をもつことにより来島につながるよう促します。また、来島者が島の自然の魅力を理解し、その恵みを十分に享受することを通して、地域の交流人口が増え、経済効果を生み、それが更なる来島にもつながる仕組みをつくります。

◇ 島と島をつなぐ

…国立公園内外の伊豆諸島の島々について、島ごとの自然環境の特徴や人と自然とのかかわり方を掘り下げて理解し、島々を並べて見てはじめて分かる各島の共通点や個性を、伊豆諸島全体の魅力として発信します。

◇ 人と人をつなぐ

…自然資源の保全や活用など、様々な面で国立公園に関わる関係者が情報共有や意見交換を行う機会をつくり、公園の管理運営において関係者が連携した取組みを行うことによって、個々の関係者だけでは困難な新たな気付きの習得や効果的な課題解決を促します。

◇ 過去と未来をつなぐ

…これまで地域が築き上げてきた伊豆諸島の魅力が未来に渡って輝くよう、継続的な保全を行う仕組みをつくるとともに、過去に蓄積されてきた情報や経験を活かした自然資源の保全や活用を進めていくことで、より良い未来につなげ、持続可能な地域社会をつくります。

【国立公園伊豆諸島としてありたい姿】

- ・ 島民が伊豆諸島の魅力を理解し、誇りに思い、守り育て、伝えている
- ・ 来島者も伊豆諸島の魅力を理解・体感することにより島を好きになり、繰り返し島へやってくる
- ・ 来島者が伊豆諸島全体に興味をもち、次は他の島にも行ってみようという気持ちになる
- ・ 魅力を守り活かすための産官学民の連携・協力体制がとられている
- ・ 利用の分散が図られ秩序ある質の高い観光が行われている
- ・ 島民及び来島者が国立公園であることを認識し、責任ある利用を行っている
- ・ 保全と利用の好循環により自然と社会の両方が持続可能な形で維持されている
- ・ 伊豆諸島ならではの生物多様性が確保され、自然文化を活かした国立公園らしい景観が保たれている

3. 基本方針と取組の方向性

方針① 国立公園制度の適切かつ効果的な運用

【基本理念との関連】

来島者と地域をつなぐ／人と人をつなぐ／過去と未来をつなぐ

【現状と課題】

国立公園は伊豆諸島の魅力を未来へつなぐための「保護」と来島者と地域をつなぐための「利用」の基盤となる制度です。しかし一部では、野生動植物の過剰捕獲や盗掘、砂漠など脆弱な場所への車両の進入、漂着ゴミ等による景観の質の低下など保護における課題や、野営場の過剰利用など利用における課題がみられます。また、そうした課題を関係者間で共有する場が不足しており、関係者の連携による効果的な課題解決につなげられていないことも課題として挙げられます。特に、各島間の移動が容易ではなく島ごとに町村も異なることから、各島間での情報共有や連携の機会は限られている状況です。

【取組の方向性】

- ・法による行為の制限や国立公園におけるマナー・ルール等の周知徹底
- ・自然資源の保全と活用の強化
- ・国立公園らしい良好な風致景観の維持
- ・利用施設の快適性向上など、計画や管理体制の見直し
- ・国立公園の管理運営に関わる行政機関及び民間団体、観光事業者等の地域内・地域間の情報共有及び連携の推進

方針② 生物多様性保全の強化

【基本理念との関連】

過去と未来をつなぐ

【現状と課題】

伊豆諸島には多くの希少種あるいは固有性の高い動植物が生息・生育しており、これらを含めて島ならではの豊かな自然を未来に残していかなければなりません。しかし、過剰採取や盗掘など人間の影響のほか、一部では侵略的外来種の影響を受けており、国内外来種を含む新たな外来種の侵入による生態系のかく乱や、近縁種の植栽及び移植による遺伝的かく乱も懸念されています。関係行政機関や各島の自然保護団体等が調査や保全対策等を行っており、一定の成果を挙げていますが、未解決の課題も多く残されています。

【取組の方向性】

- ・現状把握のための情報収集・分析と、科学的知見に基づいた保全対策の推進
- ・固有性が高い種や希少な種の保全強化（遺伝的かく乱の防止、外来種対策、盗掘対策等）
- ・各島の自然保護団体等の活動・連携促進

方針③ 持続可能性を重視した質の高い自然資源の活用推進

【基本理念との関連】

人と自然をつなぐ／来島者と地域をつなぐ／過去と未来をつなぐ

【現状と課題】

多くの魅力的な自然資源が観光等に活用されている一方で、ガイドランスの不足によって来島者に魅力や価値を十分に伝えられていない、無秩序な利用や不十分な管理によって持続的な利用につながっていない等、地域社会の持続的な発展につながる形での活用が不十分である等の課題があります。

【取組の方向性】

- ・快適かつ安全で持続可能な利用につなげるための利用拠点の保全・整備
- ・自然資源のモニタリングと適正利用に向けたルールづくり及びその適切な運用
- ・伊豆諸島の魅力を体感できるエコツアー及びジオツアーのメニューづくりとガイド養成
- ・未活用資源の掘り起こしと活用
- ・自然資源の活用による利益の自然環境保全への還元
- ・多様な利用者に適正かつ快適に楽しんでもらうための外国語対応の推進
- ・ニーズに応じたエコツーリズム及びジオツーリズムを推進するための利用実態等の把握
- ・火山景観及び生態系の防災・減災への活用

方針④ 科学的知見を含む自然環境の情報整理と島内外への普及啓発及び環境教育の推進

【基本理念との関連】

人と自然をつなぐ／来島者と地域をつなぐ／島と島をつなぐ／過去と未来をつなぐ

【現状と課題】

伊豆諸島には島ごとの地形・地質、動植物、歴史文化等の様々な魅力や島間の差異やつながりなどがあり、島単位だけではなく多様な観点から自然環境の価値を説明することができます。これまでも関係行政機関や各島の観光協会等が情報の収集や発信を行っており、また近年では各島の観光関係機関

が連携して、小笠原諸島も含む「東京諸島」として地域全体の魅力発信を行う動きも活発化しています。しかし、多様な観点からの自然環境の価値について、科学的知見も含む情報はまだ十分に体系化されておらず、これらの魅力や国立公園としての価値は来島者や一般の島民まで十分に理解されているとは言い難い状況です。

【取組の方向性】

- ・地形・地質、動植物、歴史文化等の学術的価値をとりまとめて「見える化」する
- ・ハンドブック、展示、講演会、体験イベント等による普及啓発及び情報発信の強化
- ・竹芝及び各島におけるガイド等と連携した情報拠点施設の拡充検討
- ・島どうしで互いの島の相違性や共通性、魅力等を共有・理解し合うための仕組みづくり
- ・島の将来を担う子どもたちの自然体験の推進
- ・学校教育と連携した気候変動、SDGs⁶等の観点も含めた環境教育の推進
- ・「国立公園伊豆諸島」としての認知度向上及び東京諸島としてのPRの強化
- ・価値の継承や新たな価値の発見を目的とした、教育機関や研究者の受入れ及び調査活動の支援と成果の吸い上げ

⁶ 「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称であり、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標のこと

4. 各島ビジョン

(1) 大島

◇ 三原山カルデラの多様な火山景観を保全しながら活用する島

…三原山は日本でも有数の活火山である伊豆大島火山の中央火口丘であり、直径 3~4km のカルデラ内では、噴火の度に大きさや形を変えてきた中央火口や、江戸時代から現代までの複数回の噴火で形成された新旧の溶岩の奇観、降り積もった溶岩が浸食されてできた溪谷、「裏砂漠」と呼ばれ火山灰やスコリアで覆われた黒い砂漠など、他に類を見ない多様な火山景観が広がっている。また、カルデラ内では裸地から、パイオニア植物であるハチジョウイタドリが成長し、ススキ草原や低木林を経て森になるまでの植生の遷移をみることができる。このような火山活動の痕跡や火山とともに生きる植物の姿を間近に観察することで、生きている地球の営みと生命の多様性やたくましさを実感できる貴重な場所である三原山カルデラを、十分に堪能できるように保全し、一定のルールの下、観光や教育等の資源として活かしていくことが重要である。

◇ サクユリをはじめとした島ならではの植物をまもり価値を伝える島

…大島では、幅広い模様のサクユリをはじめとして、オオシマザクラ、オオシマツツジ、ガクアジサイ、ヤブツバキなどの伊豆諸島ならではの花々や、スカシユリやタイトゴメなど島の強い潮風にも耐える海浜植物など四季折々に特徴的な植物をみることができる。また、人々は古くから伝統的にヤブツバキを椿油や燃料、工芸品、防風林等として活用し、アシタバを食用として利用するなど、人の生活と植物との密接なつながりも特徴である。このような島ならではの植物が将来にわたってみられ活用できるように保全・再生し、その自然的・文化的価値を島内外に伝えていくことが重要である。

◇ ダイナミックな溶岩と多様な生物が織りなす豊かな海の景観を発信する島

…大島の海岸部はトウシキ海岸などの荒々しい溶岩の海岸や、海中でみられる溶岩アーチや柱状節理など、溶岩が生み出したダイナミックな景観が特徴である。また、ここではサンゴやウミウシ、クマノミやイサキの群れ、アオウミガメ、シュモクザメ等をはじめとした多様な生きものが生息しており、火山景観と合わせてダイビング等の重要な資源となっている。首都圏からの距離の近さにも関わらずこの様な豊かな景観がみられる海の魅力をさらに発信していくことが重要である。

(2) 利島

◇ 「自然と共生した暮らし」を楽しみ、交流につなげる島

…島の規模が小さく人と自然の距離が近い利島では、ヤブツバキの種子を椿油として、サクユリの根を焼酎として、シドケ等の山菜を食料として、海岸の玉石を石垣として利用するなど、自然の恵みを持続的に利用してきた。特にツバキの利用に関しては、樹上で完熟し落下した種子を拾い集める手法をとっていることから、下草刈り等の林床が丁寧に管理されており、サクユリ等の生育にも適した環境となっている。この様な自然と共生した暮らしを来島者にも楽しんで貰うなど、交流による「利島型観光」の推進につなげていくことが重要である。

※利島型観光：島民が自ら楽しむ地域づくりのツールとして、利島の風景・文化・自然等に興味・関心を持って訪れる人々を友人として迎え入れる観光のあり方

◇ 人々によって引き継がれてきたツバキ林の景観の価値を発信し、未来へ継承する島

…利島は全島がヤブツバキの林で覆われていることが特徴であり、ツバキの段々畑が利島独特の美しい景観を形成している。ツバキ産業は250年以上前から継続して行われており、ツバキ林も先祖代々受け継がれてきた島の財産である。こうして人々によって引き継がれてきたツバキ林の美しい景観の価値を発信し、次世代に残していくことが重要である。

◇ 様々な動植物がくらす宮塚山の魅力を大切にす島

…利島の宮塚山は、噴火年代が古いことから、山頂付近を中心にスタジイやタブ等による鬱蒼とした植物群に覆われており、セッコクラン等の着生植物も多くみられる。また、そうした植生の豊かさから、近隣の島ではほとんどみられないアカコッコやイイジマムシクイ等の鳥類がみられたり、オオミズナギドリ等の繁殖地となっていたり、多様な鳥類の棲み処にもなっている。登山利用も盛んであり、大海原をはじめとしてツバキ林や集落等を眺めることができる山頂部からの景観も魅力の一つである。このような様々な自然が楽しめる宮塚山を登山者が堪能できるよう保全していくことが重要である。

(3) 新島

◇ きらめく白砂の海岸を堪能できる島

…新島は風化した流紋岩からできた白砂の美しい海岸景観が特徴である。海岸の白砂は石英の含有量が高く白く輝いていることから「世界一のきらめきの白い砂」と称されている。特に白砂の海岸が約 7km に渡って続く羽伏浦海岸や、高さ 250m ほどの白砂の崖が浸食を受けできた白ママ断崖、さらに島の南端まで続く広大な白砂の浜は、他の島にはない類まれなる景観である。また、外洋の高い波を受けるためサーフィンの国内屈指の名所にもなっている。これらの海岸景観を美しい状態で維持し、その魅力を人々が堪能できることが重要である。

◇ コーガ石（抗火石）を持続的に活用し、新島ならではの景観や文化を育む島

…新島で産出するコーガ石は、流紋岩の一種で多孔質かつガラス質の岩石であり、新島周辺でしかみられない貴重なものである。コーガ石は建築物やモヤイ像等の石像、タイルの原料等に用いられ、特に冬の強い西風を受ける集落部ではコーガ石による風除けの塀が独特の街並みを形成している。また、コーガ石を材料としたオリーブ色の新島ガラスは島特有の産業となっている。このようなコーガ石の活用を持続的に進めることで新島特有の景観や文化を育み、その価値を島内外へ発信していくことが重要である。

◇ 宮塚山のスタジイ林を中心とした生態系をまもる島

…新島ではスタジイ林が島内に広く分布していることが特徴の1つとなっている。とりわけ北部に位置する宮塚山では、山の東側を中心に原生的なスタジイの自然林が残存しており、サクユリや希少なラン類なども生育している。適切な森林管理を行いながら、こうした貴重な植生が将来に渡って残されるようまもっていくことが重要である。

(4) 式根島

◇ **複雑に入り組んだ海岸とクロマツ林が織りなす美しい海岸景観を保全・再生する島**

…式根島は、複雑に入り組んだ海岸とそこで生育するクロマツ林、海岸近くの奇岩や小島、白砂等により風光明媚な海岸景観を呈しており、特に南東部の海岸部は「式根松島」と呼ばれている。これらの美しい海岸景観を将来に渡って楽しむことができるよう保全・再生していくことが重要である。

◇ **自然の恵みをゆったりと快適に味わえる環境を大切にする島**

…穏やかな入江に囲まれ、周囲 12km と小さな島である式根島は、雄大な海を眺めながら自然の中で温泉浴を楽しむことができる地蛇温泉や足付温泉、松が下雅湯をはじめ、素晴らしい海岸線を望み自然とふれあいながらキャンプを楽しめる大浦キャンプ場、クロマツ林で森林浴ができるハイキングコースなど、自然の恵みを落ち着いてゆったりと味わえる場所を多く有している。このような魅力的な島の環境を大切に保全し、適切な利用を推進していくことが重要である。

◇ **多様な生きものや現象がみられる海中の魅力発信し持続的に利用する島**

…式根島では、海水の透明度が高く複雑な地形を有する海でみられるタカベやキンギョハナダイの群れ、ミノカサゴ、サンゴなどの多様な生きものに加え、海底から温泉が湧き出す御釜湾の「海中温泉」とその周辺に生息するアオウミガメなど、豊かな海の自然があり、ダイビング等の重要な資源になっている。これらの魅力を発信しながら、持続的な利用を行っていくことが重要である。

(5) 神津島

◇ 天上山の多様性に富んだ景観の魅力を発信し適正な利用を推進する島

…神津島のシンボルとも言える天上山は、山麓部でみられるスダジイ等の自然林をはじめ、山頂部でみられる火山性荒原や砂地、湿地、灌木林、窪地にできた池など、様々な要素により景観が構成されており、海岸性や高山性のものを含む幅広い種類の植物が四季折々でみられることが特徴である。特に、流紋岩質の火山であることに起因する白砂の砂漠景観や、そこでたくましく生きるオオシマトツジやサクユリなどの色鮮やかな花々の景観は天上山ならではの特異な景観であり、「花の百名山」にも選定されている。このような景観の魅力を発信しつつ、景観を構成する植物や地形に影響を与えずに、適正な利用を推進していくことが重要である。

◇ 海辺の自然環境をまもり快適かつ持続的に楽しむ島

…神津島では豊富な魚類と複雑な地形が織りなす海中景観が大きな魅力であり、テーブルサンゴやチョウチョウウオ等がみられる赤崎をはじめ、多くの場所でダイビング等を楽しむことができる。海域では海鳥類も多く生息しており、特に無人島である祇苗島及び恩馳島はカンムリウミスズメの繁殖地にもなっている。また、独特の模様がみられる流紋岩が立ち並ぶ海岸線や、透明度の高い海と白い砂浜とが相まった美しい海岸景観も魅力の1つである。このような海辺の自然環境をまもりつつ、快適かつ持続的に楽しむことができるよう、適切な利用を推進することが重要である。

◇ 黒曜石や湧水など神津島ならではの自然資源がもつ歴史や物語を伝承する島

…神津島では、流紋岩の一種でガラス質の岩石であり、石器時代から本土において矢じり等に利用されていた良質な黒曜石や、伊豆諸島の神々による水の配分が行われた“水配り伝説”に由来するとされ、天上山に降る雨が砂にしみこんだ後に島内各所から湧き出している湧水など、島ならではの自然資源がそれらにまつわる歴史や物語とともに大事にされてきた。このような島の自然とともに生きてきた人々の歴史や、島の自然と深く結びついた物語を、子ども達に伝えていくことが重要である。

(6) 三宅島

◇ 火山のもたらす景観や自然を大切に、火山と共存する島

…三宅島は、ひょうたん山や新鼻新山等のスコリア丘や、冷え固まった溶岩が波の浸食を受けて出来た荒々しい黒色の海岸など、過去の噴火活動により形成されたダイナミックな火山景観が島の至る所でみられることが最大の特徴である。火山活動は今なお続いており、雄山の火口部では噴気がみられるほか、山腹では火山ガス等の影響により立ち枯れた木々等が特異な景観を呈している。また、溶岩や火山砕屑物に覆われた裸地からヤシャブシ低木林等を経て照葉樹林が形成されるまでの、植生が再生する過程の諸段階を一つの島で観察できることに加え、照葉樹林では繰り返す噴火のなかでも力強く生長し続けている巨樹が多くみられることも特徴である。人々もまた、2000年の雄山噴火による全島避難にも耐え、その後の地域を再生しながら、火山の脅威と向き合いつつも火山の恵みを温泉や観光資源等としてうまく活用するなど、島に対する愛情とたくましい力で「火の山」との共存を続けている。「火山とともに生きる三宅島」として、火山を中心とした自然環境を残していくことが重要である。

◇ 黒潮と火山が織りなす豊かな海洋環境をまもる島

…黒潮の流路にあたる三宅島の海は、サンゴの群集やクマノミなどの温帯・熱帯魚やウミウシ、カンパチなどの回遊魚の群れなど様々な海の生き物を観察することができ、ウミガメの産卵や、近年ではザトウクジラの回遊もみられる。また、溶岩が造り出すアーチや切り立った壁などの複雑な海底溶岩景観とも相まって豊かな海中景観を呈している。特に伊豆諸島随一の大規模なテーブルサンゴが発達した富賀浜や、溶岩が波で浸食されたメガネ岩、溶岩に囲まれた自然のタイドプールで多種の生きものが観察できる長太郎池などは、ダイビングやスノーケリングの利用拠点として人気である。これらの豊かな海洋環境を保護しながら、持続的な利用をはかることが重要である。

◇ 多種の野鳥の生息に適した自然環境と島の生物相を保全する島

…三宅島は、ヘビや肉食哺乳類など鳥類の天敵が少なかったことから諸島のなかでも野鳥の生息密度が高く、アカコッコやイイジマムシクイ、オーストンヤマガラ、ウチヤマセンニュウなどをはじめとして、希少種や固有種を含む多くの種類の野鳥がみられる。特に、諸島最大の淡水湖でありスタジイやタブを主とする原生林が残る大路池では多数の鳥類がみられることからバードウォッチングが盛んであり、繁殖シーズンには圧巻の鳥のさえずりを堪能できる。また、伊豆岬や富賀浜周辺等の草原は草地環境を好むウチヤマセンニュウにとって良好な繁殖地となっているほか、三宅島の南に位置する大野原島はカンムリウミスズメ等の海鳥の繁殖地として重要な場所となっている。バードアイランドとも呼ばれる三宅島の野鳥の生息環境を中心としながら、生物多様性を保全していくことが重要である。

(7) 御蔵島

◇ 苔生す深い森とそこで育まれる多様な自然資源の価値を保護し発信する島

…御蔵島は伊豆諸島のなかでも噴火年代が古いことから、遷移の最終段階であるスダジイ林が最も広範囲に見られる島である。また周囲を海食崖に囲まれ、標高 851m の御山まで海から一気に突き上げる急な山形をしていることから、山頂付近では霧を森の樹木がとらえて雨となる「樹雨」が発生し、水が豊富で苔むした石や着生植物に覆われた樹木の多い鬱蒼とした森となることが特徴である。この様に育まれた森では、ツゲの天然木やスダジイの巨樹、オオタニワタリ等のシダ植物、ミクラミヤマクワガタ等の固有の昆虫など多様な動植物が生息しており、オオミズナギドリの世界的に重要な繁殖地にもなっている。また、豊富な水は島内で湧水や川を形成し、質の高い飲料水としても親しまれている。豊かな森とそこで育まれる動植物や水などの自然資源の価値が保たれるよう保護しながら、その価値を島内外へ発信していくことが重要である。

◇ ミナミハンドウイルカと人との良好な関係を未来へ継承する島

…背後に豊かな森を擁する御蔵島の海には、多くのミナミハンドウイルカの群れが生息しており、イルカウォッチングが盛んである。ツアーではエコツーリズムの理念に基づき、事業者や観光客に対して一定のルールを設け、ツアー料金の一部をイルカの生息状況調査等に活用するなど、モニタリングによってイルカの生息に配慮する努力が行われている。このような努力を持続的に行い、自然資源と人との良好な関係を未来へ継承していくことが重要である。

◇ 自然資源を有効利用し、人と自然とのつながりを大切にする島

…御蔵島では、ツゲを将棋の駒として、ハチジョウグワなどを木工品として、海岸の玉石を石垣として、近年ではシマテンナンショウを焼酎として利用するなど、豊かな森と海からの自然の恵みを上手く利用して生活を営んできた。また、人々は自然の恵みの源である森の一部を「神山」と呼んで崇め大切にしてきた。この様に自然の資源を大切に護りながら利用し、人と自然とのつながりを大切にしていくことが重要である。

(8) 八丈島

◇ 新旧の火山と湿潤な気候が織りなす多様性に富んだ景観の魅力を堪能できる島

…八丈島は噴火年代が新しい八丈富士（西山）と古い三原山（東山）からなる島で、それぞれが特徴的な景観と自然環境を有している。八丈富士は伊豆諸島最高峰（854m）の山であり、全島を見渡す眺望や火口のダイナミックな景観が堪能でき、火口部の池や湿原、ユズリハやヤマグルマ等の植生も特異な景観を呈している。一方、三原山は浸食を受けて谷が発達しており、水が豊富で滝やポットホールなどの景観を楽しむことができる。また、八丈富士にはみられないスタジイ林が発達しており里山としても利用されてきたほか、オーストンヤマガラなど三原山ならではの鳥類もみられる。そうした新旧の火山の活動は、南原千畳敷や黒砂砂丘などの多様な溶岩景観に加え、横間海岸等でみられる波の浸食を受けて丸みを帯びた溶岩を活用した玉石垣などの里の景観も形成している。また、温暖で雨が多い海洋性気候であることから、ヤコウタケをはじめとした発光生物が多くみられる。発酵菌を活用したくさやの食文化があることも特徴である。火山と気候の影響を大きく受けたこれらの多様な魅力を人々が理解し安全に堪能できることが重要である。

◇ 八丈小島の鳥類等を保全しながら質の高い利用を進める島

…八丈島の北西 7.5km に位置する八丈小島は、昭和 44 年に全島民が離島した歴史をもつ無人島である。伊豆諸島で唯一タチモヘビも生息しておらず外来種の影響が少ないことから、伊豆諸島の原生的な自然環境を残していることが特徴である。諸島のなかでも特にアカコッコやカラスバト等の生息密度が高く、クロアシアホウドリをはじめとした海鳥類の繁殖がみられるなど、鳥類にとって良好な生息地となっている。また、八丈富士と三原山の両方を眺望することができる大平山や、昔の民家の石垣や学校跡、神社等、遺構もあり、希少な鳥類の観察や自然探勝だけでなく、歴史文化や自然環境に関する学習の場としての活用も考えられる。クロアシアホウドリ等の鳥類の生息環境の保全を大前提としつつ、利用については適正かつ秩序ある質の高い利用となるよう促していくことが重要である。

◇ ザトウクジラなどが生息する豊かな海を持続的に利用する島

…温暖で黒潮の影響を大きく受ける八丈島の海は生きものに恵まれ、アオウミガメやユウゼン、クマノミなど多くの生きものがダイビングやスノーケリングの重要な資源となっているほか、メジナやカンパチ、ヒラマサ等の釣りも盛んである。また、近年になってザトウクジラの回遊が確認されており、観光利用の期待が高まっている。これら海洋生物の生息状況を把握し、適切な配慮をしながら生態を学ぶといった持続的な観光利用を行っていくことが重要である。

<参考> ビジョン検討経緯

本ビジョンの作成に当たっては、環境省関東地方環境事務所が実施する「国立公園伊豆諸島における自然文化資源を活用した魅力創造事業」において関係者による意見交換等を実施しながら、検討を進めました。また、当該事業の一環として、以下の会議以外に青ヶ島の関係者とも情報共有を行いました。

各島準備会：平成 29 年 11 月～平成 30 年 2 月に 8 島で開催

東京準備会：平成 30 年 2 月に開催

- 地域資源の保全・活用に関する現状及び課題について
- 島の将来像について
- 伊豆諸島の連携について

有識者会議：平成 30 年 12 月に開催

- 伊豆諸島の自然環境等の学術的価値について（火山、植生、鳥類、海洋生物等の観点から）

エリア別部会：平成 31 年 1 月～2 月に 4 エリアごと（大島・利島／新島・式根島・神津島／三宅島・御蔵島／八丈島）に開催

東京準備会（第 2 回）：平成 31 年 2 月に開催

- ビジョン（素案）について

エリア別部会：令和 2 年 1 月～2 月に 4 エリアごと（大島・利島／新島・式根島・神津島／三宅島・御蔵島／八丈島）に開催

- ビジョン（案）について
- アクションリストについて

国立公園伊豆諸島地域連絡協議会において決定

【各種会議の参加者】

環境省、東京都、各町村、各島観光協会、自然保護関係者、ガイド、宿泊事業者、交通事業者、有識者 等